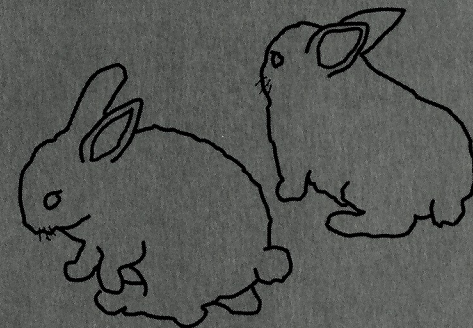


生きもの 博物誌

【ノウサギ】
日本



ウサギのいる風景

田口 洋美
(たぐち ひろみ)

東北芸術工科大学教授

危うい存在

「ウサギ追いしかの山、小鮎釣りしかの川：」名曲である童謡「ふるさと」は、自然環境に恵まれていた古の長閑な田園風景を人びとに想起させる。しかし、それは現代を生きるわたしたちのノスタルジーに過ぎない。「ふるさと」が尋常小学校児童用の唱歌として採用されたのは大正三（一九一四）年のことである。この年、ヨーロッパでは第一次世界大戦が勃発した。そして、子どもたちが故郷の山々でウサギを追っていた風景は、この戦争と無縁ではなかった。

十数年前までノウサギたちは僕たちの日常の周辺を撥ね、疾走していた。例え海浜の砂防林のなかであっても、ノウサギたちが疾走する姿を当たり前のように見かけることができた。林床に干からびたノウサギた

ちの丸い糞が散乱し、細かく見て歩けば食痕すら見つけることができた。ノウサギたちは山里だけに棲んでいたのではなかった。しかしその身近さゆえに、クマなどと違って存在にインパクトがなく、彼らに向けられる視線はぎわめて希薄だった。研究という視点から見てもノウサギの生態に関する研究事例はほとんど見られない。また動物保護運動においても中小型動物に対する扱いはとても気まぐれであり、アマミノクロウサギほどに過熱する例はめずらしい。そこにノウサギたちの危うさがある。

軍需利用の犠牲に

かつて、ノウサギは近代日本の外貨獲得のための欧米向け毛皮として、あるいは大陸の寒冷地に進出した

軍部の兵員用防寒毛皮として乱獲された時代があった。とりわけ昭和十二年ころから二〇年にかけて、軍需用防寒毛皮として陸海軍部によって全国のウサギ飼育農家や地域の猟友会からウサギの毛皮が収集された。その数、年間一〇〇万枚。大日本猟友会の資料によると、例年の捕獲数は六〇〜七〇万羽であったものが戦時体制下の軍部主導による統制狩猟に入った段階で一〇〇万羽を超え、戦前まで頻発していたノウサギによる農作物被害は皆無となったと記されている。日中戦争から太平洋戦争にかけては、戦闘機のパイロットたちが身に付けていた飛行帽や手袋の内張り、陸海軍の将校たちの防寒コートの内張り、ノウサギあるいは飼育ウサギの毛皮を使用していた。さらに、ウサギ肉は軍事工廠の労働者や兵員用の食糧として缶詰などに利用され、貧窮していた都市住民の食糧とされた。ノウサギたちは、この国の近代黎明期の経済と食を支えてくれたのである。わたしたちは誰もがこの恩恵を受けている。

日本から欧米へとウサギ毛皮が輸出されはじめた明治から大正にかけての外貨獲得の時代、ウサギ飼育が農山村の副業として国家から奨励され、また地方の野山では軍によって狩猟が奨励され児童生徒までかり出されて盛んにノウサギ狩りが実施された。戦争は人間の悲劇として語られるが、その裏で軍需利用の犠牲となっていた野生動物の数は全世界的に見れば天文学的数字になるだろう。人間という動物は業が深い生き物なのである。童謡に唄われたウサギ追いしかの山の風景は、近代の経済発展と戦争という光と影がつくり出した風景であり、決して牧歌的なものではなかったのである。

大学のフィールドワーク演習で狩りに参加
(山形県小国町)



単独でおこなう忍び猟(山形県小国町)



昭和18年の実猟大会。軍需用防寒毛皮のために、
猟師には捕獲ノルマがあった(写真は静岡県駿東郡小山町提供)



ブナやミズナラの林のなかに残されたウサギの足跡(長野県秋山郷)

ノウサギ (学名: *Hares*)

ウサギ科は大きくアナウサギ(*rabbits*)とノウサギにわけられるが、日本にはおもにノウサギの仲間が生息している。北海道に生息するエゾキウウサギや氷河期の生き残りと言われる小柄なエゾナキウサギ、奄美大島だけに生息してきた化石とよばれるアマミノクロウサギ、そして一般に知られたニホンノウサギ(トウホクノウサギ・キュウシユノウサギ・サドノウサギ・オキノウサギなどに分類される)がいる。ニホンノウサギは茶褐色の体毛(夏毛)から白色(冬毛)へと季節によって毛色を変化させる。

